

実用性と学術性を結ぶ試み

——社会連携フォーラム「外交実務と地域研究の連携の可能性」から——

西芳実

近年、産学連携や社会連携といったかたちで学術研究と異業種との連携が活発に行なわれている。第3回 JAMS 社会連携フォーラム(2009年11月27日、東京大学駒場キャンパス)では、そのような異業種間連携の中でも古典的ともいえる「外交と地域研究」の連携が取り上げられ、外交実務者と地域研究者という異なる分野の専門家間で情報を共有する際の課題と意義が検討された。報告者・コメントーターのいずれも、相手の専門分野で自らの専門性にもとづき成果をあげようとした相互乗り入れの経験があり、①相手分野の「文法」をどう捉えるか、②自分の分野をどう相手分野に活用されるよう「翻訳」するかといった課題にそれぞれ具体的にどのように取り組んだかが披露された。また、「外交と地域研究」の連携というテーマをマレーシア研究から考えることの意義をめぐる活発な意見交換があり、JAMS 社会連携フォーラムの社会的意義を広く一般にアピールするうえで重要な指摘となった。

*

第一報告者の川端隆史氏は、職業外交官の立場から地域研究に関わった経験を踏まえて、外交実務の現場で地域研究の知見を活用する際の課題を以下のように整理した。

外交実務においては以前から地域研究の知見の活用が試みられている。地域研究の学説や枠組は、データをわかりやすく整理するうえで有用だと認識されている。学会や研究会のネットワークは、有用な研究の蓄積を得るための手段として期待されている。だが、実際に論文や専門書を読む際には、多数の研究業績の中でどれが

課題に対応した適切な業績なのか見つけにくいし、読もうとしても難解で理解しにくいと感ずることがある。

そのようなこともあって、研究者の持っている知識や専門性はしばしば「使えない」と評価されることがある。外交実務の現場には、研究者は現場の情報を知らない(内幕を知らない)とか、研究者には具体的な政策提言がないといった不満が実際にある。その一方で、研究者のあいだには「わかっていないのは実務者」との感ずがあるように思う。その溝を埋めることが連携にとっては重要だと考える。たとえば、外交実務の現場で得られる情報は、そのままでは個人的な体験にすぎず、時を経て使える情報ではない。では、地域研究の論文の形にまとめればよいかというと、今度は外交実務の現場で評価されなくなる。

これと別に、外交実務の現場で情報収集を行なっていると、特定の国の専門家としての知見を期待されることがある。人びとは「マレーシアに関して何でも知っている人」として専門家をイメージしているが、実際は何でも知っているわけではないし、知っていたとしてもそのままでは相手に使ってもらえない。外交の実務者がもつ知識とは、そのような意味での専門的知識ではないはずだ。そこには、専門性を支える何らかの枠組があるはずで、そのことを考える必要がある。

*

このように、外交実務の現場では高度な専門的知識が必要とされており、これをどのように実務に取り込むかという課題がある。これに対する対応の1つは、研究者を実務の現場で使うことで

ある。地域研究者の立場から大使館の専門調査員として勤務した経験を踏まえて、篠崎香織氏からは次のような報告があった。

地域研究者の専門性とは何か。自分自身が研究者として受けた訓練は、①一次資料を読んで理解する力、②データとデータとの間を埋める方法、③発見した知見の示し方と位置づけ方の3つに整理できる。研究者の特性は、問題や枠組を所与のものや自明のものとしてせず、研究者自身が自らの責任で組み立てる点にある。

これに対して、大使館スタッフとして勤務した際には、一定の枠組の中での情報収集と整理が求められた。業務は現地メディアの日本関連報道の論調分析であり、そこでは、①アジアにおける日本のプレゼンスの維持、②中国の台頭への関心、③「ルックイースト・ポリシー」のその後、④マレーシアを中国に奪われないようにといった枠組が前提とされ、枠組の妥当性そのものは不問とされた。

このような状況に地域研究者としてどのように対応したのか。自身は、与えられた枠組を受け入れた上で、①マレーシアは中国とのバランスの中で日本のプレゼンスを一定程度必要としている、②マレーシアは日中関係の動向を見ながら日本＝マレーシア関係を模索していると分析することで対応した。このような経験を踏まえると、実務の現場で他人から与えられた枠組であっても、地域研究者が自分なりにその枠組を位置づけなおして専門性を発揮し、なおかつ実務者の要求にこたえることは不可能でないと考える。

*

以上の二報告に対し、在外公館で委嘱調査員として外交実務に関わった経験がある山本博之氏がコメントした。山本氏のコメントは、以下に

みるように、マレーシア研究が外交と実務の連携を考える今日的意義を提示した上で、マレーシア研究と外交実務が互いに利用可能な形で双方の知見を「翻訳」する可能性について問うものだった。

現代のグローバル化が進展した状況においては、個人が世界の人びととのやり取りに直接さらされており、共通のルールをもたない相手と共生することが求められる。「話せばわかる」人びとだけでつくられたコミュニティの中で自立・発展することが約束されない。また、「場」の流動性が高いため、知識や経験が「場」に蓄積されない。このような状況における情報伝達と意思決定のあり方が現在問われている。

これに対してマレーシアでは、独立当初から「一国家に三民族」であることを認め、それに基づく国家運営の仕組みを作ってきた。いわば、国内に互いに「話せばわかる」が通じない相手がいることを前提に、その上で情報伝達と意思決定の制度化を試みてきた。その意味で、マレーシアは今日のグローバル化の時代に先だって「話せばわかる」が通じない人たちによる社会を作ろうと努力を重ねてきた地域である。その経験を参照することは「外交実務と地域研究」というテーマについて考える上で極めて重要である。

*

二報告では、実務者と研究者が互いに相手をどのように見ているかが示されていた。研究者は①資料や事象に対する深い読み、②全体像を踏まえた分析、③常に枠組を更新しようとする試みがあるのが学術研究であると考えており、実務者の整理した情報は「知識のつまみ食い」と見えてしまう。他方、実務者には研究者の知見が「現実世界と無縁の絵空事」と見えてしまう。

そうであるならば、実務者と研究者はそれぞれ次のことが問われているといえる。実務者は、「知識のつまみ食い」という批判に対して研究者と同じレベルでの理解を目指すのか、それとも「つまみ食い程度だからこそ我々の専門性が発揮できる」とするのか。また、研究者は「現実世界の地に足が付いていない」と言われたとき、研究を通じて現実社会にコミットしているとするのか、それとも「地に足が付いていないからこそ我々の専門性が活かされる」とするのか。

これと別の話として、外交実務の現場で枠組が固定されているとの篠崎氏の指摘は、優秀であるかないかという担い手の個性に頼らずにチームプレーを徹底するための方針であり、それによる多少のマイナスはやむを得ないという考え方が背景にあると考えれば十分に理解できる。ただし、このやり方で今日の国際社会のあり方に十分に対応しきれるのかという課題は残る。仕組みそのものは維持したうえで、機動力を高めるために外部の研究者との連携が必要とされているのだろうと想像される。

*

本フォーラムにおける議論は、地域研究を含めた学術研究が現在抱える課題に以下の点で対応しているように思われる。

第一に、大学院教育の位置づけが大きく変わりつつあるなかで、大学院で得られる知見の意義が問われている。現在の大学院は、「新卒」学生だけでなく学術研究以外の分野で経験を積んだ人びとを受け入れるようになっている。国際協力の分野で特に顕著な現象だが、実務経験を踏まえた学術論文の執筆をめざす人びとが増えている。このことは、狭義の研究者養成だけでなく、教育研究機関以外の場で活動することを前提と

した修士号や博士号の取得者の養成を大学院に求める動きと並行している。そこでは、大学院でこそ得られる技能や知見への期待と、それがそのままでは実用に適さないことへの不満が同時にあらわれている。

本フォーラムで、実務者と研究者が情報整理・分析の枠組という観点からそれぞれの専門性と意義を説明したことは、実用性を高めるにせよ学術性を高めるにせよ枠組が重要であることを示しており、興味深い。

第二に、特定の専門分野だけで解決できない新たな問題領域が増え、実務者と研究者の連携が求められる一方で、双方のメリットをどのように確保するかが重要な課題になっている。すべての研究者が政策提言を志向しているわけではない。むしろ、研究者の間には、実践と関わることで学問の純粋性を損ねるとの考え方が根強くある。実務者との連携は余芸あるいは寄り道であって、学術研究活動そのものには繋がらないとする考えである。そのような状況下で、従来のようなプロジェクト・ベースあるいは属人的な連携にとどまらない制度的な連携はどのように可能になるだろうか。

さしあたり考えつくのは、実務者との連携に否定的でない研究者が連携に何を期待しているか、そのニーズを掘り起こすことだろう。単に研究成果を応用する場としてだけでなく、学術研究の発展そのものに寄与するような実務者との連携の可能性が拓けるならば、研究者と実務者の連携は、単なる余芸ではなく、専門性を深めるための一活動として評価されることになる。今回のフォーラムでは、時間の都合もあり、この点についての議論は十分には発展しなかったが、今後の社会フォーラムの活動に期待したい。